

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F A504教室】

日本語とクメール語における勧誘会話の対照研究
—《勧誘部》に着目して—

Kuy Siemkiang

本研究では、ロールプレイを分析データとして用いて日本語とクメール語の勧誘会話の構造、特に《勧誘部》の相違点や特徴を明らかにする。勧誘会話は《開始部》《勧誘部<交渉部>》《相談部》《終結部》の4つに分け、《勧誘部》に着目して分析する。《勧誘部》で相談を行う場合<交渉部>が現れる。本稿では、その<交渉部>を<都合の交渉>と<勧誘の内容の交渉>に分けて考察する。その結果、日本語の勧誘会話の《勧誘部》では、まず都合の話がされ、都合が合えばすぐ承諾をすることが明らかとなった。また、<交渉部>が現れる場合は<都合の交渉>の方が多かった。一方、クメール語の勧誘会話の《勧誘部》では都合が合ってもすぐに承諾せず、<勧誘の内容の交渉>を先に行う会話の方が多く見られた。その結果から、JNSIにとっては勧誘の内容より都合のほうが勧誘の承諾をするかしないかの理由になるが、KNSは都合より内容のほうを重視する傾向にあると言える。

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F A504教室】

なぜ「からかい」として理解することが可能なのか
—「じゃ」で始まる確認要求を用いた発話に着目して—

吳 青青

本発表は、日本語の会話教育に提案することを目指し、日本語母語話者の雑談をデータとし、「からかい」の連鎖構造の特徴を会話分析の枠組みを用いて明らかにしたい。特に、「じゃ」で始まる確認要求を用いた発話に着目して、なぜその発話を「からかい」として理解することが可能なのかを解明したい。分析の結果、以下のことが分かった。(1)「じゃ」で始まる確認要求に相手の拒絶反応を引き出そうとする挑発性があるが、その挑発性を緩和するオフレコード・マーカの使用によって遊戯性も伝えられる。(2)話し手は相手の発話の揚げ足を取り、相手に反抗される可能性が高いものを「じゃ」で導入して確認を求めることにより、「からかい」という行為を達成する。(3)「じゃ」というプラクティスの使用は、相手の先行発話と論理的に帰結することができるので、その発話の攻撃性の責任を回避する。

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F A504教室】

職場ドラマにおける謝罪行動の中日対照研究
—「謝罪場面」と「謝罪頻度」を中心に—

李 竺楠

中国と日本の謝罪行動に関しては、「中国人はあまり謝らず、日本人はよく謝る」というステレオタイプ的な違いが末田(1993)、金田一(1987)などによって指摘されているが、実際にそのような傾向があるかどうかを数量的に検証した研究は、筆者の知る限り見当たらない。そこで本研究では、「職場」という日常の活動領域において、謝罪表現がどのような場面もしくは文脈で、またどれくらいの頻度で使われるかを、テレビドラマで描かれる職場の場面で観察された謝罪の用例を量的・質的に検討し、中日の謝罪行動に関するステレオタイプの妥当性を考察する。

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F A504教室】

ネットことばを扱った教材の開発と活用について

Chamorro Sebastian

近年、日本語学習者のニーズの変化に伴い、日本語教育におけるバリエーションの扱いは重要な問題となった。また、スマートフォンが普及し、インターネットがより身近なものとなり、インターネット上の特殊なことばも日常的に遭遇するバリエーションになってきている。日本語学習者もインターネットを利用している際に特殊な表現に遭遇し、日本語教師に指導を求めることがあるが、インターネット上の特殊なことばを取り入れた教材は見られず、指導を行うことが困難である。

本発表では、インターネット上の特殊なことばの中で、学習者が遭遇しやすいものを「ネットことば」と呼び、それらを扱った日本語教材の開発について述べる。語形ではなく、意味や用法、使用場面などに注目しながら、ネットことばを分析し、教材で活用できる分類を行った上で、実際に作成した教材を提示する。

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F A504教室】

発達障害者の対人コミュニケーションについての言語人類学的一考察
—会話参加者のスタンステイキングに着目して—

合崎 京子

本発表は、スタンスという概念の持つ社会指標性に注目し、社会的コミュニケーションの障害といわれる発達障害を持つ人の対人コミュニケーションについて、言語人類学的分析の枠組を用い、分析・考察を行うものである。Ochsら(2004)が提起する対人コミュニケーションにおける3つの社会的領域、すなわち(1)やりとりの順番交替規則についての理解レベルの領域、(2)他者との相互行為の状況シナリオ理解レベルの領域、(3)社会文化的意味の理解レベルという領域のうち、特に社会指標理解レベルの領域におけるコミュニケーションを中心に、発達障害当事者が会話内で表出したスタンスについて分析を行う。以上の結果を踏まえ、会話参加者のスタンステイキングを実際の会話事例を用いて調査することにより、発達障害者のコミュニケーションの困難さが各領域でいかに生起しているか、また各領域間の関係性がどのような構造をなしているか具体的に呈示する。

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F A504教室】

複合名詞における動詞型概念の構文的意味拡張
—名詞型複合名詞における動詞的機能—

小林 邦子

本稿で討議するのは、「歩きスマホ」が[他動詞連用形＋具体名詞形]型複合名詞を前提とするが、[動詞連用形＋動詞基本形]型複合動詞としての構文機能があるという仮定である。瀬戸(2005)の比喩的拡張を援用すると、「スマホ(する)」とは一つの動作だけを意味しているのではなく、「電話をかける」/「メールをする」/「検索する」などの独立した行為が、「歩く」と共に同時に起こる現象である。それぞれの行為は隣接をしていて、換喩という分類になる。

「歩きスマホ」は「歩きながらのスマホ操作」であり、石山(2014)によれば、smartphoning while walkingとなる。ここで、smartphoningとwalkingの動作について領域D(dominion)の中にある動作主R(reference point)が行為をするとき、その行為自体をT(target)として、構文のもたらす機能の認知について考察する(Langacker2008)。

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F A504教室】

会話における引用発話の引用開始標識とその働き

伊藤 翼斗

本研究の目的は、日本語の会話において引用が使用される際に、引用箇所とそうでない箇所をどのように聞き分けているのかについて会話分析の観点から明らかにすることである。本発表では特に、引用が始まってすぐ、つまり引用箇所の冒頭付近で、話し手がどのような資源を利用しているのかについて分析する。分析の結果、引用発話における引用箇所の冒頭では①引用開始前とは異なる音調的な特徴づけ(発話の速度、音の高さ、声色、声の大きさ、りきみ、笑い等)、②発話が始まったと認識可能な要素(「いや」などの応答詞、「えっ」などの間投詞など)、③ダイクシスに関わる要素(指示詞、人称、「今」などの時間表現、呼称など)の三つが利用されていた。これら①～③の引用の資源は、聞き手にとって「引用箇所の終了」と「引用発話の終了」を投射する資源としても利用可能であり、聞き手がターンを取りたい場合などに、これらの資源は用いることができる。

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F A504教室】

スポーツ実況におけるオーバーラップの解消
—発話の中断と再開をめぐる調整—

劉 礫岩

テレビのスポーツ実況中継において、コメントと実況によるオーバーラップ(以下OL)がしばしば起こる。本研究はカーレース実況をデータとし、このOLがどのように対処されるかについて分析を行った。具体的には、1)コメントの進行中に、別の参加者が実況を開始したことによって生じるOLと、2)直前の出来事に対する実況が終わっても良い位置で、複数の参加者が同時に発話を開始したことによって生じるOLに対する調整を分析した。その結果、いずれの場合も、コメントがいったん中断され、実況の完了後に再開される。それによって実況が優先される。再開の方法は、1)では再生が多く、2)では継続が多く用いられるが、しばしば実践的な問題である。また、コメントがすぐに中断されない事例も観察された。この場合、専らアナウンサーが1つの単語内部の中断と継続によって、解説者とのOLを解消しつつも、実況の優先性に志向していることが分かった。

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F A504教室】

日本語の友人間の雑談における価値観に関するやりとりの開始

高井 美穂

日本語非母語話者を対象とする日本語の会話教育への応用を念頭に、友人間の雑談にみられる「生き方」に対する価値観をめぐる意見のやりとりがいかんにして互いに理解可能な方法で開始されているのかを会話分析の手法を用いて分析した。分析の結果、隣接対の第一成分となる価値観は、思考を表す動詞「思う」によって意見であることが明示されており、第二成分に同意／不同意あるいは価値観の表明を誘う発話として聞きうるよう組み立てられていた。さらに、当該隣接対に先立つ経験の報告ないしはそれに対する評価の発話において成員カテゴリー化装置(サックス1972a)の利用がみられ、第二成分の話者もそれを利用して自身の価値観を示していた。

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F 実験実習・語学系教室(4)】

ブラジル日系二世と日本人が日本語で依頼行動を行う際の対照研究
—発話機能の分析を中心に—

小野 和信

ブラジルには世界最大の日系社会があるので、日本語を話せる人が多く存在する。その中、ブラジルで継承語として使用されている日本語の大きな特徴は、ポルトガル語との接触のみならず、日本の各地からブラジルへ移民しているため、様々な方言と接触していたことである。前述した二段階の接触がゆえ、ブラジルで成立した標準語は、日本で話されている標準語とは異なっている。さらに、第二外国語として習得された日本語も話されているので、ブラジルの文化・社会やポルトガル語である母語に影響され、日本語母語話者が話している日本語とは異なっている。そこで、本研究では語用論の観点から分析をするように、日本人と日系ブラジル人が日本語で依頼行動を遂行する際に用いた表現を比較し、それぞれの特徴や相違点を明らかにした。

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F 実験実習・語学系教室(4)】

ピア・レスポンスを取り入れた中国語話者学習者の日本語ライティング学習の効果検証
—母語話者の評価をめぐって—

余文龍

本研究の目的は、上級レベル中国語話者日本語学習者がピア・レスポンス(PR)活動を行う際、(1)学習者がどのようなビリーフを持ってPRの各プロセスに取り組むかの考察、(2)学習者のPRコメントの効果及び学習者のコメントの視点と評価者の評価視点の相違があるかの検討、(3)PRを通じた修正稿の評点は初稿より良くなっているか、また他に評価に影響する点があるかどうかを考察し、そこに存在する問題を明らかにすることである。

上級レベル中国語話者日本語学習者30名に、PRを通して、アカデミック・ライティングのうちの説明文と意見文を一つずつ書いてもらった。その後、日本語母語話者10名に、「総合的評価」と「分析的評価」の2通りの方法で評価してもらい、インタビューと評価シートの結果によってPRの効果と一連の要素を検討した。本発表では、本研究の考察結果を取り上げ、説明する。

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F 実験実習・語学系教室(4)】

介護現場における外国人介護人材の「自己」の位置づけ
—実践共同体におけるメンバーシップとアイデンティティの獲得—

尹 恵彦, 嶋津 百代

本発表は、外国人介護人材が介護現場に定着するために何が重要な要因になるかを、正統的周辺参加の枠組みを用いて探るものである。実践共同体において外国人介護人材が「自己」をどのように位置づけているか、そしてその「自己の位置づけ」が、かれらの成長を促し就労を持続させる側面となることを検討する。研究方法は、外国人介護人材のM氏とA氏にインタビューし、ナラティヴ・アプローチによって分析を行った。その結果、M氏は「実践共同体に貢献できる自己」を形成し、「全人格的つながり」の営みに従事することができている。それに対し、A氏は「契約的なつながり」の営みに留まり「実践共同体に必要とされない自己」を形成し、そのように自らを共同体に位置づけているのがわかる。このような実践共同体のメンバーシップとアイデンティティの獲得の過程を明らかにすることが、介護現場の人材の確保と定着の問題解決に繋がるのではないかと考える。

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F 実験実習・語学系教室(4)】

会話の組織化に寄与する「話題性」
—「いかに<話すこと>を促すか」という観点からの捉え直し—

名塩 征史

本発表では、理容室における会話データの分析と記述をもとに、日常的な会話の実践を支える性質としての「話題性」、すなわち、経験的なレベルでの会話の継続や組織化において発揮される「いかに<話すこと>を促すか」という性質に焦点を当てた議論を試みる。

まず、会話中に提示される事柄の中には、長く話題として保持され、類似の形式で繰り返される発話連鎖を促すような性質を持つものが認められた。本発表では、このような「どのような志向で話すか」といった参与の形式を緩やかに指定する話題性について示す。

また、会話に伴う理容行為の過程で偶発的に知覚された情報が、現行の話題での会話を中断して、先行する近過去の話目を喚起する事例にも注目する。本発表では、それまでの発話連鎖からは予期し難い唐突な話題転換をスムーズな推移へと収めるために喚起される事柄の性質も、会話の多様な展開に適応可能な話題性として提唱する。

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F 実験実習・語学系教室(4)】

多文化共生社会に寄与しうる接触場面研究の可能性
—「おもてなしの日本語」の概念生成をめざして—

尹 智鉉, 春口 淳一

本発表では、日本の多文化共生社会に寄与しうる接触場面研究とは何かを考察した結果について報告する。接触場面研究の変遷と展望を探ることで、社会に役立つ言語・コミュニケーションの研究成果の活かし方を考察し、社会への還元について提案を行うことを本研究の目的とする。調査では、Cinii所蔵の「接触場面」研究論文(直近5年、計66本)へのメタ研究を実施した。研究対象および研究成果に関しての傾向に着目したところ、研究対象のバリエーションは拡大しつつも展開の余地がまだ大きく残されている一方、研究成果の還元も未だ教育場면을専らとしていることがわかった。多様な接触場面こそが多文化共生社会の一端を体現するものであると考え、今後充足される必要があるだろう。本研究は言語ホストとゲストの双方の「歩み寄り」の体現を目指した「おもてなしの日本語」を、そのための研究課題として提唱したい。

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F 実験実習・語学系教室(4)】

上級日本語学習者の自己評価から見る動機づけ
—ポートフォリオを用いて—

山本 晃彦, 末吉 朋美, 竹口 智之

本研究ではポートフォリオが学習者自身にどのような働きかけを行っているのかについて動機づけの視点から考察を行った。

関西大学留学生別科2016年度秋学期の日本語上級クラスではポートフォリオの一環として、週ごとの自己評価(自由記述式)の作成課題を提示した。コメント分析では、常に変化する意欲を自律的にコントロールしながら学習を進めている様子がうかがえた。特徴として、①ポートフォリオにおいて学習者自身が、有能感を獲得し、内発的動機づけを高めようとする働きかけを行っていること、②動機づけの持続にはネガティブな自己評価が影響している可能性があること、③「頑張ります」というコメントには自分自身へのエールとして用いているケースと課題提出のためのパフォーマンス的メッセージとして用いているケースがあること、④教師との関係性を自身の動機づけへと転換する学習者の存在、などが認められた。

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F 実験実習・語学系教室(4)】

合意形成型対話における相手行為の繰り返し

居關 友里子

本研究では、会話参加者が相互に対等な決定権を持つ者として、合意形成をしようとする振る舞いについて分析を行った。扱ったのは友人同士二人一組で行った合意形成型課題対話におけるやり取りである。本研究では「対話相手の行った行為を繰り返す」形でなされる「提案-同意・非同意」の行為連鎖に注目した。A「これかな?」という提案に対してB「こんなかんじかな?」と提案が返され、Aが同意を示すものであり、課題全体に対する最終的な決定権が示される箇所、課題の終了を提案する際に特徴的に現れていた。一般的な「提案-同意・非同意」の隣接ペアでは「提案した者」と「同意を与えた者」という構図が否応なしに形成される一方、提案に提案を返すやり方ではこのような構図が見えにくくなる。その結果として、参加者が対等に決定に関わり合意形成を行ったこと、ひいては協働的な課題達成を示し合う手段となっていると考えられる。

<<ポスター発表>> (9月17日 13:20-14:35)

【1号館(A棟)5F 実験実習・語学系教室(4)】

異文化間コミュニケーションにおいて「共に笑う」相互行為が示唆するものに関する一考察
—会話分析の手法を用いて—

大野 百合香

グローバル化の進展が進む現代社会において、異文化間コミュニケーションの実態を明らかにすることはますます重要となってきた。そこで本研究は、自然発生的な日常会話場面において、人々が異なる文化や言語に接触する際、どのように関係性の構築や維持を行っているのかを解明するために、対人関係の構築や維持に関係する「共に笑う」という相互行為に着目し研究を行う。本研究は、言語レベルや文化背景の異なる人々による食事会の場面を分析し、「共に笑う」には、偶然起こった笑い与会話参加者達の活動によって「引き出された笑い」があること、引き出された笑いには、参加者の言語レベルの違いを問題としないような方法が用いられていることを明らかにした。今後の課題は、他にどのような方法が用いられているのかを探求するとともに、参加者達が「共に笑う」を通して何を達成しようとしているのかを明らかにすることである。